【ねがいましては】

平成２１年９月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２２７号

「雲より遅くて十分さ」

子どもたちが受け取る一般的な矛盾、学校でも家庭でも、「助け合いなさい、協力し合いなさい。」と言われながら、いざテストとなると、親たちは勝ち負けにこだわるようになります。いや教職に携わる方々もその例に漏れないようです。そして子どもたちに一つの結論が見えてきます。「どうやら勉強の世界は助け合うことは難しいらしい・・・。」

この教室で見せる子どもたちの様々な表情、まず、お隣同士が同じプリントなどを行っていると、お互いお隣が気になる様子。そして答え合わせをしてみると、なんと同じ答えでバツ。合っていて同じならともかく、間違えはいろいろなはず・・・。間違えること、合うこと、かなり気にしてしまうようです。

私は心の中でため息をつきます。私も少年時代はそうであったのですが、成績主義の産物のようです。

子どもたちに宿ってしまう危険な心理・・・合えばいい・・・。とにかく合えばよいのです。宿題でも同じ、終わればいいのです。

勉強の面白いところは（実は教える立場になって分かったこと）、結果を味わうのではなく、結果までの過程を楽しむことだと思います。例えば、数学の計算なのですが、文字式でも方程式でも、その計算過程に味わいがあるのです。ここに通っている中学生や小学生（もうすでにやっている子がいるもので）で、この意味がわかる子は多いと思います。

ですが、この気持ちを奪い取ってしまうものが現われます。テストです。合うか合わないかのみの世界へと放り込まれることで、楽しさを覚えた気持は徐々に薄らいでいきます。

夕方、そろばんの時間、１分でも早く教室への一心で着いたとしても、時に異様な光景が広がります。なんと半数近くの子どもたちが宿題を行っています。ここでは宿題をしてもよいことになっているので、皆、慌てて始めます。中には部活動を行ってからの子もいるわけで、ここでの宿題行使は仕方ないのかもしれません。そんな中、その子が学校で勉強にどのような気持ちで接しているのか、見極める良い機会にもなります。勉強怖がりさんになってしまっているのか、前向きさんでいるのか・・・。

しかし私はひそかに心の中で抵抗します。「宿題を出すくらいなら、学校側は放課後『宿題時間』などを設けてほしい。」

私の中に矛盾が現われます。「部活動とは何なのだろう・・・学力低下に対する処置の一環としての宿題であるならば、学校にいる時間帯にこそ、その処置の在り方が問われるはずだ・・・。」

私が小学校の頃は、週６日しっかりと学校へ通いました。勉強やらされすぎだとは微塵も感じませんでした。放課後の時間もたっぷりとありました。毎日のように学校から帰ると夕暮れまで友だちと遊びました。もちろん宿題もありましたが、それほど負担ではありませんでした。計算でも４年生時点で３けた×３けたの筆算は当たり前であったように記憶しています。

中にはなかなか教科書についていけない子もいましたが、そのような子たちには先生からの温かい支援が待っていました。放課後、お残りで指導がありました。その終わりには、担任の先生から暖かい差し入れがあったりして、なんとラーメン屋さんからラーメンが届きます。「よく頑張ったわね、ご褒美よ。」

勉強を教わるというより、先生の温かい気持ちをいただいたように思います。ここに勉強がなかなか思うようにうまくいかない子たちにも一握りのぬくもりが生れます。「先生は僕たちを見捨ててはいない。」

東京の下町の小学校で育った私には、先生はみんなに平等に温かいものを配ってくれているという人情味を教わりました。

夏休みが終わり、地元の中学校では２期制、３期制と様々なもので、定期テストがバラバラ・・・。相手がテストとなると、どうも精神的に弱い子たちが多いのかな。バリバリとポジティブに向かっている子は少ないようです。

テストや成績に関係なく、自分の世界に勉強を持ち込んだ時の集中力は気持ちの良いものです。

これで中学校へ行ったら、あの前向きな瞳は萎えてしまうのかな・・・。そう思ってしまうことがなんとも切なくてなりません。

この連休に久しぶりに「１５才」という DVD を見ました。その中に出てくる、ある引きこもりの少年が書いた詩があります。

『草原のど真ん中の１本道をあてもなく浪人が歩いている　ほとんどのやつが馬に乗っても、浪人は歩いて草原を突っ切る　早く着くことなんか目的じゃないんだ　雲より遅くて十分さ　この星が浪人にくれるものを見落としたくないんだ　葉っぱに残る朝つゆや流れる雲　小鳥のつぶやきを聞き逃したくない　だから浪人は立ち止まるそしてまた歩きはじめる』

それぞれがそれぞれの人生を精いっぱいに生き切る。そのことを伝え続けよう。そう思います。